

成田市 天神峰中央所在野馬土手

— 県単道路改良(幹線道路網整備)委託埋蔵文化財調査報告書 —



平成 25年 3月

千葉県県土整備部
公益財団法人 千葉県教育振興財団

序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第713集として、千葉県成田土木事務所の県単道路改良（幹線道路網整備）委託事業に伴って実施した成田市天神峰中央所在野馬土手の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、矢作牧の野馬土手に伴っていたと考えられる溝が新たに検出されるなど、この地域の歴史を知るうえで多くの貴重な成果が得られています。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際しご指導、ご協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また発掘から整理までご苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成25年3月

公益財団法人 千葉県教育振興財団

理 事 長 渡 邊 清 秋

凡　　例

- 1 本書は、千葉県県土整備部成田土木事務所による県単道路改良（幹線道路網整備）委託（成田小見川鹿島港線）事業に伴う埋蔵文化財の調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

天神峰中央所在野馬土手 千葉県成田市天神峰字中央 144-6 (遺跡コード 211-086)

- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部成田土木事務所の委託を受け、公益財團法人千葉県教育振興財団が実施した。

- 4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は以下のとおりである。

調査研究部長 関口達彦 調査2課長 橋本勝雄

発掘調査期間 平成24年12月1日～12月11日

調査担当者：上席文化財主事 黒沢 崇

整理作業期間 平成24年12月12日～12月28日

整理担当者：上席文化財主事 黒沢 崇 水洗注記～報告書刊行

- 5 本書の執筆は上席文化財主事 黒沢 崇が行った。

- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育振興部文化財課、成田市教育委員会、千葉県県土整備部成田土木事務所、成田市三里塚御料牧場記念館ほか多くの方々からご指導、ご協力を得た。

- 7 本書で使用した地形図は下記の通りである。

第2図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「成田国際空港」・「下総滑川」・「佐原西部」
・「成田」平成22年

第3図 成田市役所発行 1/2,500 成田市都市計画図36・43 平成3年測量

第6図 地図史料編纂会編 明治前期 関東平野地誌図集成「大里村」

- 8 本書で使用した地図の座標値は、第1図が日本測地系、第4図が世界測地系にもとづく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。

- 9 図版1の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和48年3月撮影のものを使用した。

本文目次

序 文	
凡 例	
目 次	
第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 事業の経緯と経過.....	1
2 調査の方法.....	1
第2節 遺跡の位置と矢作牧.....	2
第2章 調査の成果.....	4
第3章 まとめ.....	8
抄 錄.....	卷末

挿図目次

第1図 千葉県内の近世牧位置図.....	2	第4図 調査区平面図.....	6
第2図 矢作牧位置図 (S=1/50,000)	3	第5図 調査区断面図・出土遺物.....	7
第3図 周辺地形図 (S=1/5,000).....	5	第6図 迅速測図と調査成果.....	9

図版目次

図版1 航空写真 (S=1/10,000)	図版3 土手・溝 (SD-001 ~ 003)
図版2 調査前土手	図版4 溝 (SD-001 ~ 005)・出土遺物

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 事業の経緯と経過

県道成田小見川鹿島港線は、成田市寺台から旧小見川町を経て、神栖市筒井へ向かう主要地方道である。成田国際空港と鹿島港を連携する重要な機能を担う道路であり、空港平行滑走路の北伸や鹿島港の埠頭開発に伴い交通需要は増加しており、道路拡幅・歩道整備などを目的に路線の整備が順次進められている。平成22年度に県単道路改良(幹線道路網整備)事業による天神峰工区の道路整備計画の実施にあたり、千葉県印旛地域整備センター成田整備事務所(当時)より「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では現地踏査結果を踏まえ、事業計画地内に野馬土手が所在する旨の回答を行った。そしてこの回答を受け、その取り扱いについて関係機関による協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、公益財團法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することになった。なお、天神峰工区内には今回調査地の500m東側にもう1条の野馬土手が所在するが、今回の道路工事計画には入らず、調査対象とはならなかった。

発掘調査は調査対象の631mに対して平成24年12月3日に開始し、11日終了、引き続き、12月28日まで整理作業を実施した。調査により土手形状・構造が判明したほか、5条の溝が検出され、小型の石臼や馬具の一部と考えられる金具が出土した。

2 調査の方法

発掘調査

調査対象の遺跡は野馬土手で、計画された工事範囲内にはコの字に巡る土手が現存した。コの字土手の内部及び外部についても堀等の遺構の遺存が想定されるため、工事範囲内全体が調査対象区となった。調査地の現況は保安林に一部指定されていたため、事業者による保安林解除・密生する竹林の伐採後に発掘調査を開始した。掘削作業に入る前に地形測量調査を実施した。調査自体は土手を中心としたトレチによる確認調査のみであり、方眼杭などの設定は行わなかった。確認トレチは西側土手と東側土手を通じて横断する東西と南側土手に直交する南北方向のTの字の2本を設定した。

今回の調査では、部分的にデジタルデータでの記録保存を行った。追尾式トータルステーション・電子平板測量ソフトを利用した遺構実測システムにより、地形測量図・トレチ配置図・遺構平面図・遺物出土位置図を記録した。遺構断面図については従来通りの手実測により記録作成した。写真についてはデジタルカメラ(RAW・JPEGデータ)による撮影とともに、35mmフィルム写真撮影を併行して実施した。

検出した遺構は土手を所在する部分毎に西側土手・南側土手・東側土手とし、溝をSD-001～SD-005と呼称した。なお、旧石器時代包蔵地ではないため、下層確認調査は実施していない。

整理作業

遺物は水洗と注記を行った後、接合作業と実測作業等を行った。併行して、調査図面・写真の記録整理を進め、トレース、挿図・写真図版をデジタル編集により作成した。遺物写真はデジタルカメラでのみ撮影し、記録保存した。その後、原稿執筆・編集・校正作業を経て、この度報告書刊行となった。

第2節 遺跡の位置と矢作牧（第1～3図、図版1）

今回の調査対象となった野馬土手は成田市天神峰字中央144-6に位置する。牧としては矢作牧に含まれ、調査地点を示す遺跡名は字名から「天神峰中央所在野馬土手」とされた。地形的には根本名川の支流である取香川に開析された支谷の最奥部に広がる標高約40mの台地上に立地する。台地北側の谷津の水田面までの比高差は約8mである。調査対象区は、その台地を東西に横断する県道成田小見川鹿島港線の天神峰トンネル東交差点の北西側である。以下、矢作牧を中心に説明を行う¹⁾。

千葉県内の江戸幕府直轄の牧として小金牧・佐倉牧・嶺岡牧が所在していた。矢作牧は佐倉牧の中で最も大きい牧である。矢作牧の範囲は、現在の香取市、成田市、多古町に及び、中心は成田市と多古町の十余三地区である。「矢作牧施設図」（綿貫家文書）では牧が野付村（吉岡・大室・小泉・野毛平・長田・堀ノ内・取香・一鉢田・飯籠・高津原・檜・出沼・澤・横山・前林・一坪田村）に囲まれた様子が描かれ、牧主根本鉄之助の「手控帳」によると、牧の周囲の歩数は598万740歩とされる。1986年『千葉県生産遺跡分布調査報告書』では矢作牧の野馬土手49か所（総延長18,970m）の現存が確認され、2006年『県内遺跡詳細分布調査報告書』では絵図や迅速測図、発掘調査成果等を総合的に分析し、牧の範囲を東西13km、南北10.5km、外周93.4km、面積39.7km²に及ぶと推定されている。なお、明治維新後、新政府の牧の畠作農化により、矢作牧は13番目の開拓地として、十余三（とよみ）と名付けられた。

成田国際空港建設に伴って矢作牧の南西部にあたる地点を広範囲に発掘調査が実施されている〔第2図⑦・⑧〕。調査前には土手自体はほとんど削平されており、溝状遺構として野馬堀が検出された事例がほとんどである。また、古込込前遺跡（空港No.22遺跡）〔第2図①〕では矢作牧の捕込跡が測量調査され、4つに区画された長方形（80m×70m）の構造が明らかとされた。「矢作牧捕込図」（島田家文書）とは内部構造が異なり、時期による変化の捉えられる資料として重要である。十余三稲荷峰西遺跡（空港No.68遺跡）〔第2図⑦-2〕では遺存の良好な馬の埋葬土坑が検出されている。今回の調査対象区も含まれる県道成田小見川鹿島港線沿線は、現在ではほとんど土手は消滅しているが、図版1の昭和48年段階では道路の両側に土手状の植込みが部分的に確認でき、本来は2重土手を有する野馬土手が東西に走っていたことが分かる。今回の調査によって検出された東西方向の溝もこれらに関連するものと考えられ、貴重な調査事例が追加されることになる。



第1図 千葉県内の近世牧位置図



第2図 矢作牧位置図 (S-I/50,000)

第2章 調査の成果

土 手（第4・5図、図版1～3）

第4図の地形測量図は10cmコンタで表示した。東側土手の東、南側土手の南は歩道や整地によって土手の裾が削られている。東側土手の内側は土手に沿って低く凹んでおり、堀の遺存が想定されたが、トレーナー内で観察する限りその痕跡はみられなかった。

西側土手は下部にSD-003があり、その上に構築されている。北側の調査区外には5m程度土手は延びる。第10層を旧表土と捉えると1.2m程度の盛土を有するが、盛土上半部分はしまりが弱く、碎石や缶の破片も混じっていることから現代に土を寄せたものである。下位については比較的しまりの良い土（第6・7・8層）が盛土されており、同様に新しい段階のものは判断できない。全体的にやや傾斜が緩やかで、コーナーで南側土手に繋がる部分が低く曖昧になっている。

南側土手は県道に沿って東西方向にのび、コーナーで東側土手にスムーズに連続する。高さは82cmで、3地点の土手の中で最も低い。竹根がひどく、第2・3層については境界をはっきりとさせることができなかった。土手盛土の基部は第4・5層が相当するがしまりは弱い。

東側土手は下部にSD-003があり、その上に高さ106cmの盛土で構築されている。北側の調査区外の方向に直線的に約70m連続していることが確認できた。表土層とした第1層が竹根の入り込みがひどく分層は困難であった。盛土は全体的にロームが混じるが、しまりは弱い。

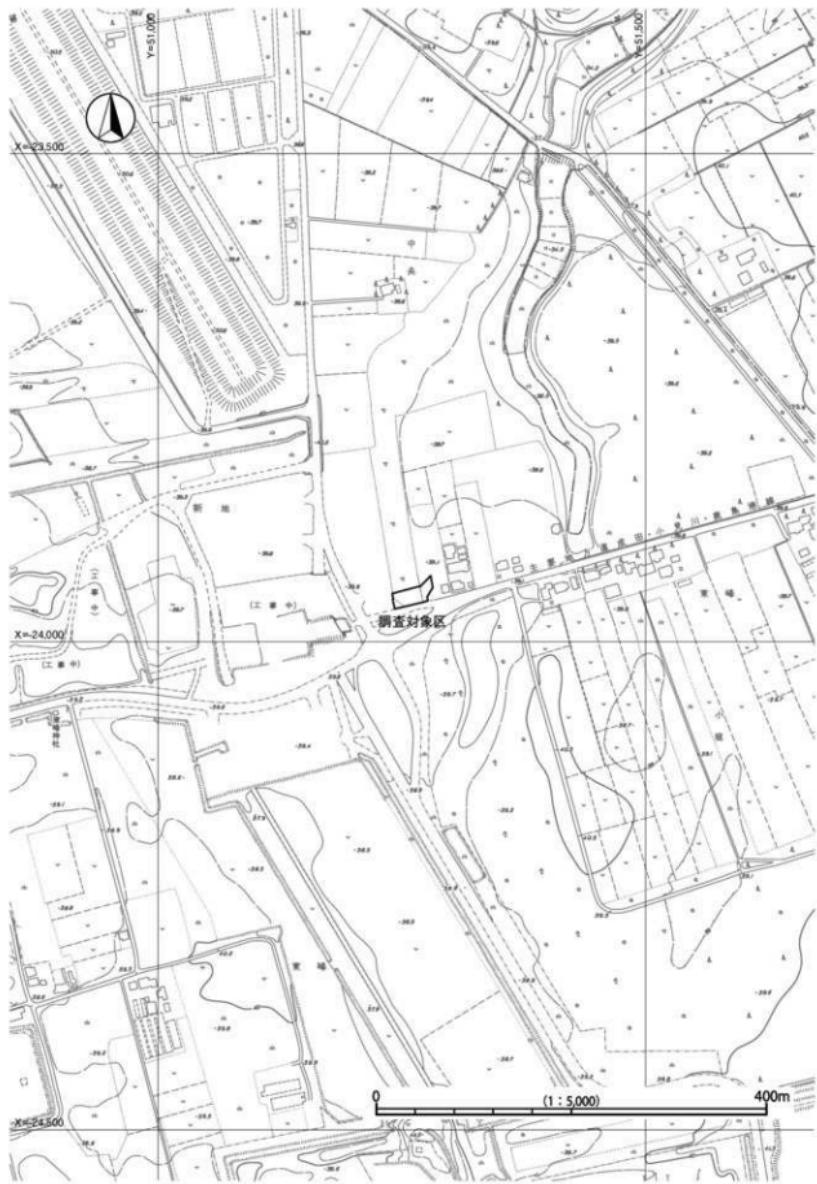
SD-001～SD-005（第4・5図、図版3・4）

トレーナーを掘り下げたところ溝が合計5条検出された。SD-001～003は県道と南側土手と平行して東西方向に延びる。SD-001-002の幅は狭く、断面形は皿状を呈する。覆土最下層が硬化している。SD-001は南側土手の下部で、掘り込み面は竹根で判然としないが、現状の土手よりは古い。SD-002は位置的に南側土手に伴う可能性がある。SD-003は幅3.3m、深さ0.45mである。東西側土手はこの溝が埋まった後の形成である。D-D'の第10層以下はSD-003覆土に相当する。断面は中心部が深く、中位の壁の立ち上がりは緩やかでテラス状となる。3層上面はほぼ平らに硬化面が広がる。SD-004・005は南北方向に併行して延びる。いずれもSD-003よりも新しい。SD-005は位置的に東側土手に伴っていた可能性があるが、竹根で表土層化した層に厚く覆われ掘り込み面は判然としない。SD-004には硬化面は確認できなかつた。

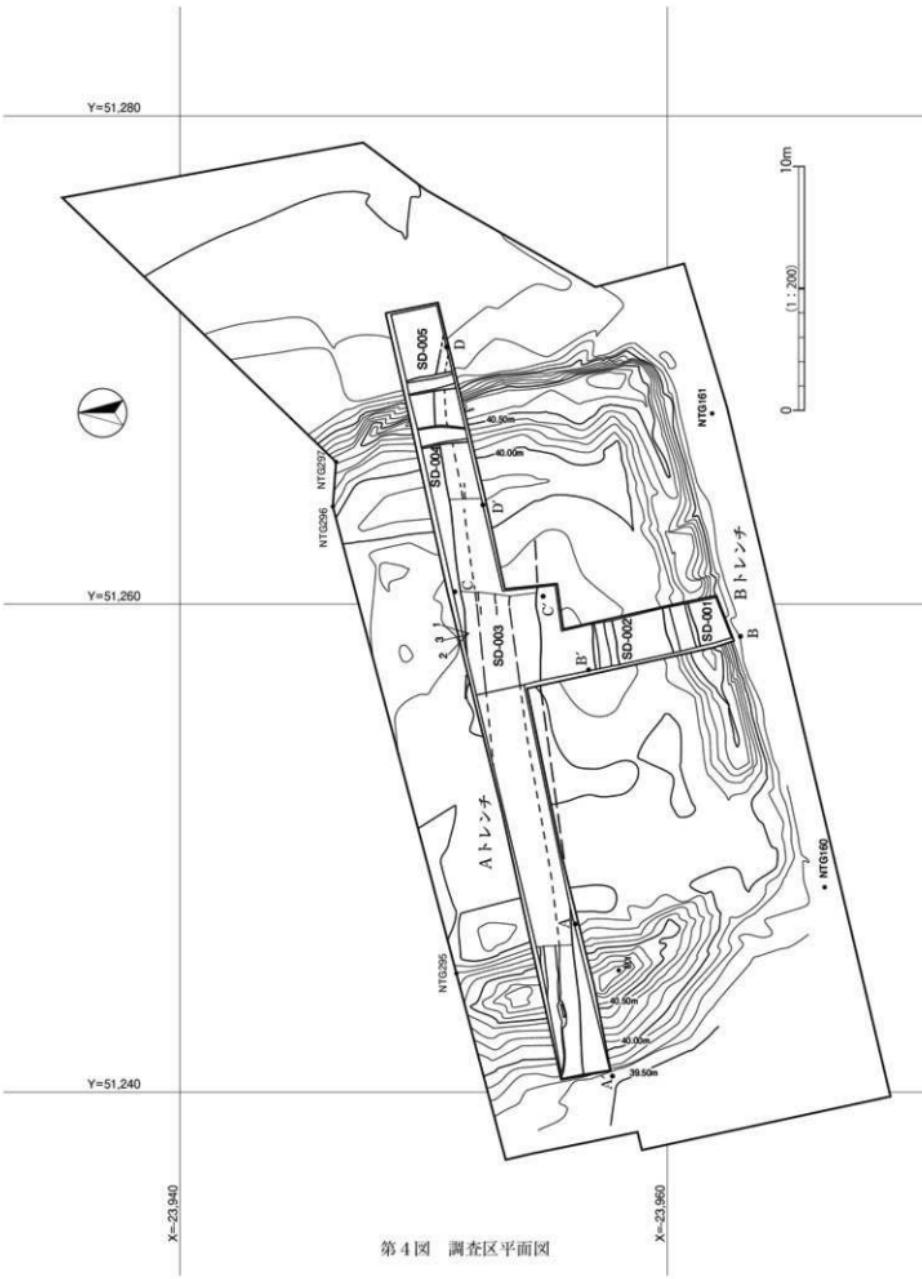
出土遺物（第5図・図版4）

トレーナー内で検出された溝覆土は最終的にはほとんど精査したが、遺物は3点のみの出土であった。A・Bトレーナーの交差する部分で検出されたSD-003の北側の壁際覆土上層からの出土である。石臼を取り上げたその下から金具2点が出土した。出土位置周辺のみ硬化面が見られず、やや溝の上端が崩れていることから新しい時期に掘り込まれたか、木根の搅乱等に一部入り込んだ可能性も否定できない。

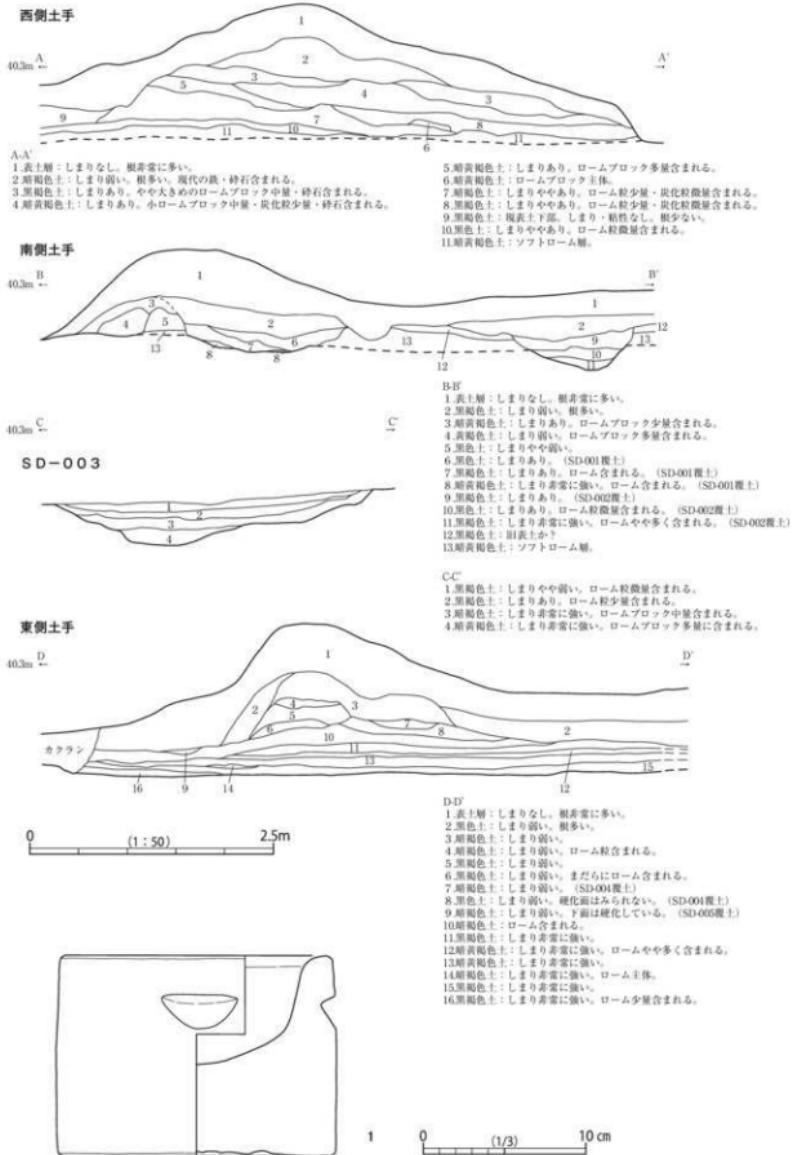
1は安山岩製の石臼である。径16.8cm、高さ12.4cm、重量5.0kgである。底面は平らで、部分的に剥落する。内面はやや黒みを帯び、使用により中心部が摩滅する。外面には小さい凹みが対でみられる。2・3（図版4）は緑青で覆われた金具で、一部皮が遺存する。形状・大きさから面繫部分に連なる紋具に相当する馬具の可能性が考えられる。大きさは2が3.0cm×3.2cm・厚3mm、3が5.0cm×2.9cmである。



第3図 周辺地形図 (S=1/5,000)



第4図 調査区平面図



第5図 調査区断面図・出土遺物

第3章 まとめ

今回の調査対象区は矢作牧の南西部にあたり、成田国際空港の東部に隣接する。調査対象はコの字に巡る土手であったが、土手部分を断ち割ったところ、東西方向に3条、南北方向に2条の平行する溝が検出された。ほとんどの溝は硬化面を有する。土手と硬化面を有する溝が検出された同様な類例として取香牧の南三里塚原第1遺跡^②)が挙げられる。当地点は明治前期の迅速測図にも細かく区画する土手の表記（第6図^③）がみられることから、検出した遺構は近世野馬土手に関連すると考えられる。西側土手は上部に現代の鉄や砕石が含まれるため、新しく盛土されたものであるが、土手の基部あたる部分の盛土には新しい要素はみられない。調査した土手自体については高さがなく、盛土自体しまりが弱く、検出された溝よりは新しい時期の構築であることから、江戸末期以降の牧の勢子土手（駒ヶ頭土手）と道（現在の県道周辺）を区画する小規模な土手の残存と考えられる。SD-002・005を除く、現存する土手に直接伴わない溝はそれ以前、道に沿う2重の野馬土手に伴う堀が通路として機能していたと想定される。遺物はSD-003から安山岩製の小型石臼と馬具と考えられる金具が出土したが、出土状況が不良のため溝の時期を決定するのは困難で、遺物の遺存状態からみて近代に下る可能性もある。

近年では鎌ヶ谷市で小金中野牧が国指定史跡になり、富里市・鶴川市でも詳細な分布調査に基づく牧の把握や活用について積極的な動きが見られている。今後とも狭小な調査範囲とはいえ、調査事例を積み重ねて、絵図や文書には表れてこない近世牧の景観や機能等を明らかにすることが重要となる。

注1) 矢作牧・周辺遺跡の内容については下記文献を参照した。第2図は下記^①文献の第27図をベースに作成し、矢作牧内の既調査地Noと下記文献Noは対応する。

① 1971『三里塚 新東京国際空港用地内の考古学的調査』(財)千葉県北総公社

② 1978『佐倉七牧－矢作牧の調査－』北総東部用水事業埋蔵文化財発掘調査団

③ 1987『小六遺跡』『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書III－大栄地区(2)－』

④ 1996『桜田野馬土手跡』香取都市文化財センター

⑤⑥ 2001・2002『事業報告X・XⅠ』『旧矢作牧野馬土手』香取都市文化財センター

⑦ 2003『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XⅧ－香山新田新山遺跡(空港No 10遺跡)十余三番荷峯西遺跡(空港No 68遺跡)』(財)千葉県文化財センター調査報告第447集

⑧ 2004『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XⅨ－東峰御幸煙東遺跡(空港No 62遺跡)－』(財)千葉県文化財センター調査報告第483集

⑨ 2008『旧矢作牧野馬除土手跡(多良見地区)』『平成19年度成田市内遺跡発掘調査報告書』成田市教育委員会

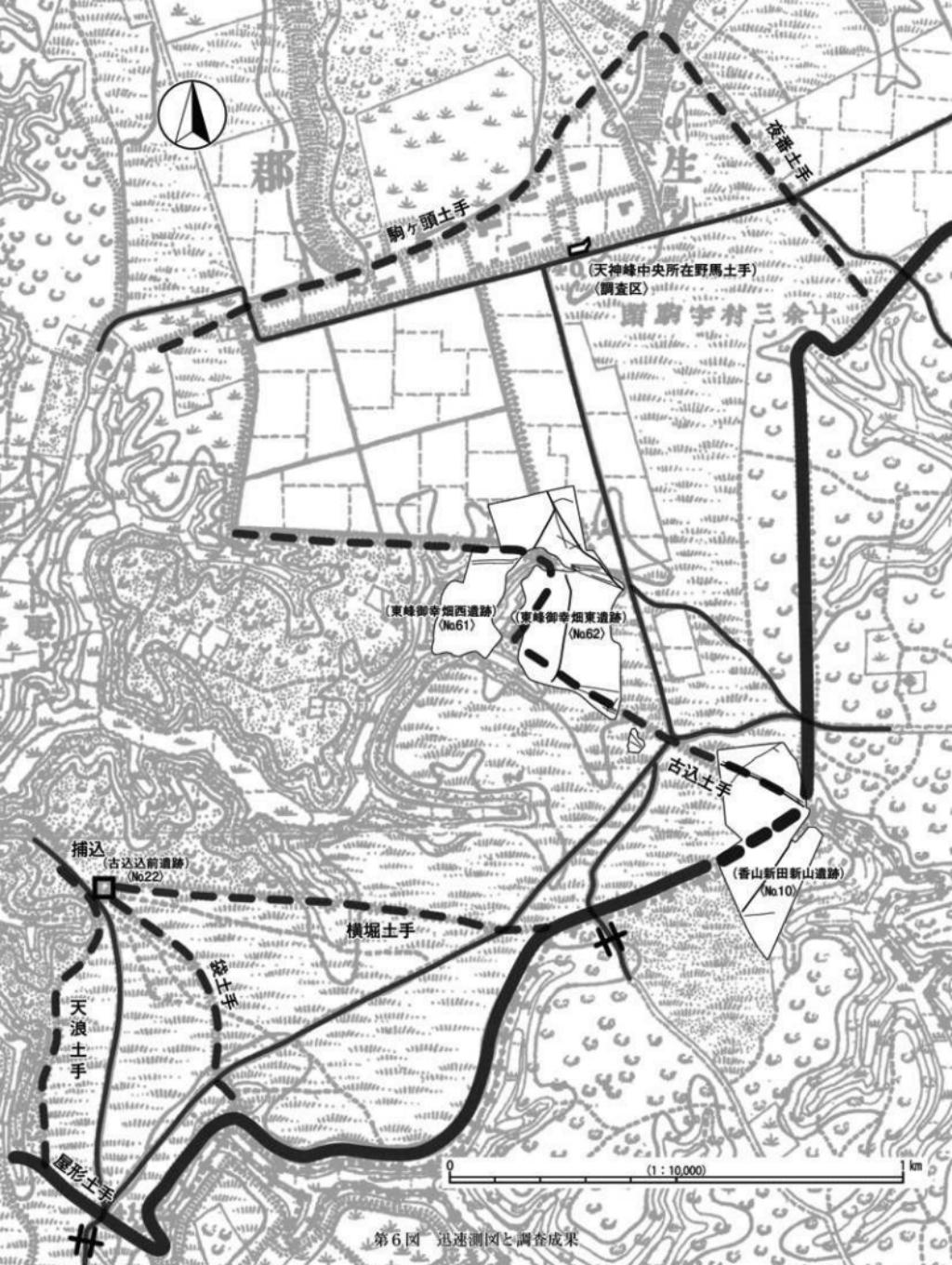
⑩ 2011『千葉県成田市旧矢作牧野馬除土手－官林赤道整備事業に伴う埋蔵文化財整理委託－』(財)印旛都市文化財センター発掘調査報告書第294集

⑪ 1986『牧』『千葉県生産道路詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会

⑫ 2006『矢作牧』『県内遺跡詳細分布調査報告書 房総の近世牧跡』(財)千葉県教育振興財団

2) 2006『千葉県成田市 南三里塚原第1遺跡 南三里塚原第2遺跡』(財)印旛都市文化財センター発掘調査報告書 第206集

3) 第6図については迅速測図と空港関連遺跡の調査成果をまとめた上記⑧文献を参照し、「矢作牧地図」、「取香牧圖」に描かれた土手や道路・木戸について同定できるものを表記した。



第6図 応急測図と調査成果

写 真 図 版



天神峰中央所在野馬土手



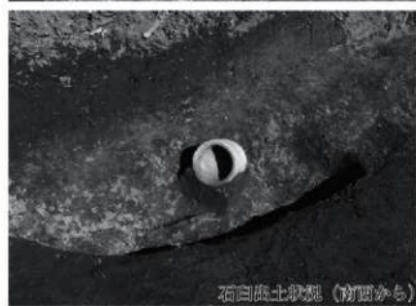
航空写真 (S=1/10,000)



調査前土手



土手・溝（SD-001～003）



溝 (SD-001 ~ 005)・出土遺物

報告書抄録

千葉県教育振興財團調査報告第713集

成田市 天神峰中央所在野馬土手

—県単道路改良（幹線道路網整備）委託埋蔵文化財調査報告書—

平成25年3月15日発行

編 集 公益財團法人 千葉県教育振興財團
文 化 財 セ ン タ ー

發 行 千葉県 県 土 整 備 部
千葉市中央区市場町1-1

公益財團法人 千葉県教育振興財團
四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株式会社 エリート情報社 [印刷出版局]
成田市東和田415-10
